

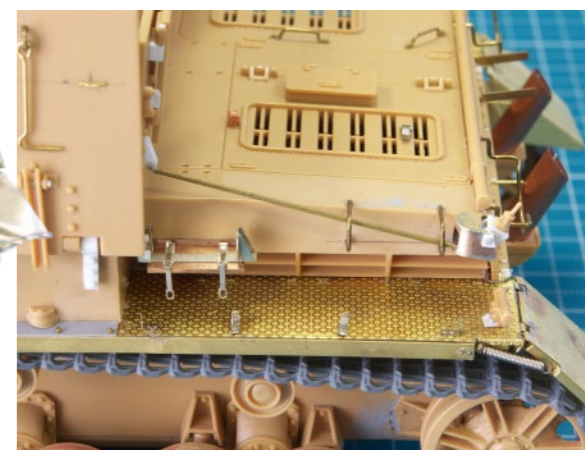
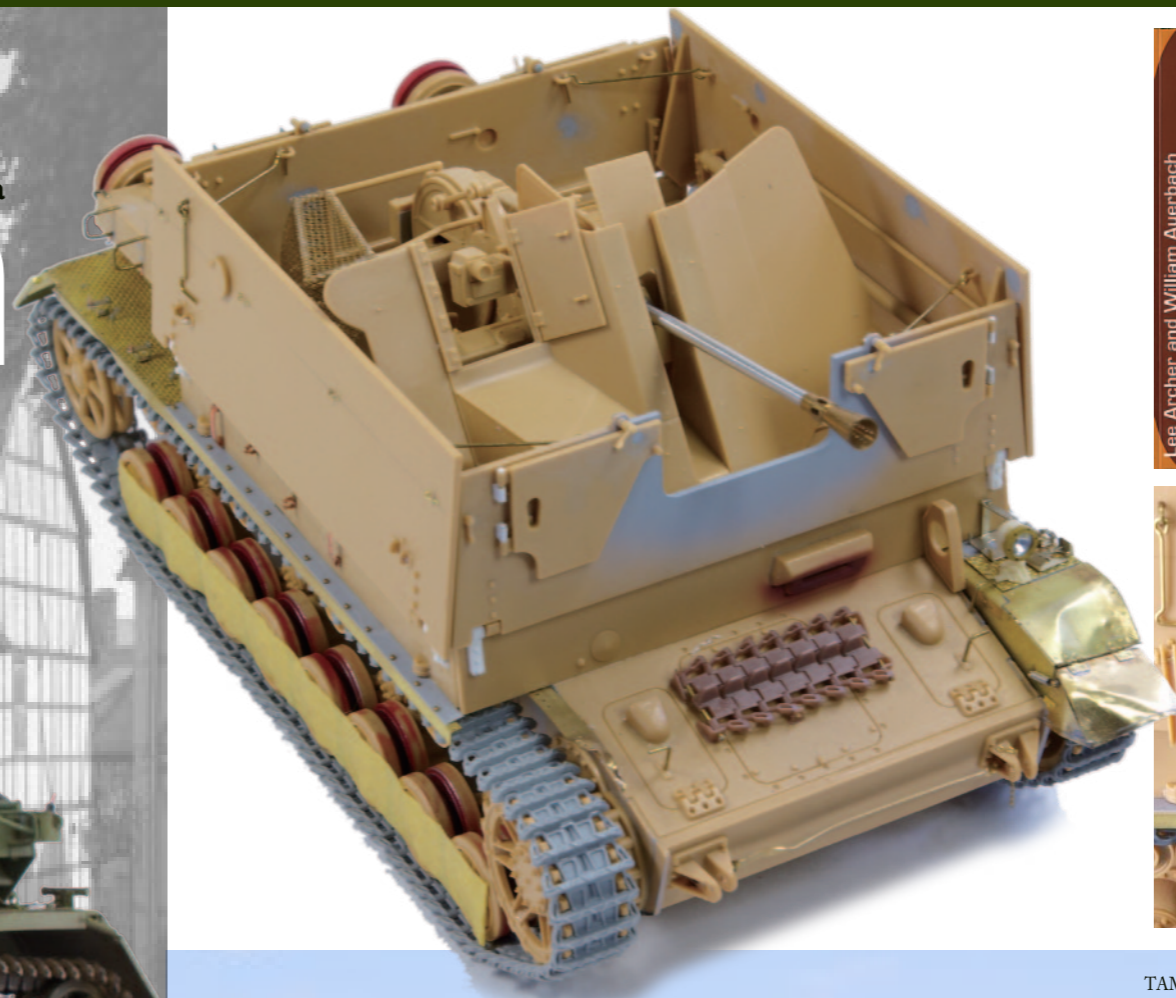
# Flakpanzer IV Sd.Kfz.161/3

## Möbelwagen

Modeling by Kunihito Kawamura



May-O  
SHIZUOKA HOBBY SHOW 2010  
20th Modelers club combination exhibition



TAMIYA MM 237 Möbelwagen Sd.Kfz.161/3 3.7cm Flak auf Fgst Pz.Kpfw.IV [Sf]  
 PERFECT METAL GUN BARREL No.35-001 3.7cm Flak36/37  
 ABER 35A99 German tool holders-Late used from 1943(new relase)  
 35A09 Fenders for PzKpfw IV  
 MODELING ARTISAN MORI No.MGP17 German Bosch headlight set  
 ARMORSCALE A35-002 3.7cm Flak36/43  
 ULTRACAST 35035 Canadian/British Tank Crewman Europe-1943-45  
 DRAGON Magic Track  
 and use other detail up parts.  
 1/35 scale

「PANZER WRECKS」6号表紙はカッコ良いメーベルワーゲンが飾っている。英兵が寄りかかるその車両は前面の可動式装甲板に砲を避けるための大きな切り欠きがあり、通常の顔つきとは随分印象が違い精悍に見えるが、それとは対照的にアヒルのようなパーソナルマークが正面に施され愛嬌を放つ。車体側面には捕獲時に書かれたのか白い「X」マークがあり、英兵の姿と共に役目を終えたことを象徴しているようだ。

15ページの解説を読むと同誌2号にも同じ車両が掲載されているとある。見ると右後ろからの別ショットで可動式装甲板は閉じたままだけれど砲は後ろ向きに変えて、これがまたカッコ良いメーベルワーゲンの姿。「うーん!カッチョエー!、これは作りたい!」と、言うわけで、この第655軍重戦車駆逐大隊所属011号車をタミヤのメーベルワーゲンを使い再現することにした。タミヤのキットは細部の表現で形状の誇張や省略が見られるものの、プロポーションは大きなデフォルメもなくなかなか良かった。

最新のドラゴン4号シリーズと比べるとやや見劣りする部分もあるが、組み易さや入手のし易さなど勝る部分もあり、少し手を加えれば今でも充分通用する。実車写真で見られる細部の特徴を再現するため工作を施した。アンテナ基部は模型的に見せ場になるのであえて追加した。塗装は実車写真のベースカラーはかなり暗く写っており、樹木の枝のような暗く濃い色の迷彩が描かれている。一見してグリーンベースにブラウン系の帯迷彩と推定できるが、この写真をPCに取り込み画像加工ソフトでコントラストを誇張させて検証すると、単色に見える部分にほんやり明るい色の領域が見えてくる。もしかすると暗めのダークイエローとオリーブグリーンの迷彩にブラウンの帯を重ねた3色迷彩であり、写真はベースカラーの一色が強く感光している可能性がある。この検証を元に3色迷彩で塗ることも考えたが、仕上がりは写真の印象と異なると予想できる。それでは011号車の再現モデルに見えないと考え、当初の印象通りグリーンベースにブラウンの帯迷彩で仕上げた。



ground photo : gettyimages